

高田保馬の描く「全體社會」像

——『民族論』から『世界社會論』へ——

はじめに

高田保馬の多彩な文業のうち、『民族論』をはじめとする民族学関連の著作は、どちらかというところ批判的にとられることのほうが多い。一面からみると高田は、満州事変から敗戦までの期間に、時局に寄り添うような民族論を展開した社会学者である、という印象をいだかれてもむりのない発言を行っている。したがって戦時中の情勢と高田の民族研究とを関係づけて、いくつかの批判点らしきものを見出すことはさして難しいことではない。しかしその一方で高田民族論を擁護する者もいて、それによると高田の著作にみられる卓抜な論理性が、強調されているようである(大道、一九五三)。だが、批判と擁護のいずれの立場をと

吉野浩司

るにしても、高田のある一時期の著作を個別にとりあげ、その可否を論じたものであるという点ではかわりない。確かにそうした個別の批評は、それなりに意義のあることだろう。しかし高田保馬の真価は、むしろ高田社会学全体の一貫性、体系性にこそあるのではないだろうか。だとすると、ある時期を便宜的に切り取って論評することで、なにか見落としてしまうものがあるのではないか。本稿の課題はこうした疑問に答えることにある。

そこでまず行論としては、高田の民族研究へのいくつかの批判をとりあげ、それらにみられる高田像の一側面を読み取ることにする。その上で、そうした特徴づけからすると看過してしまいがちな、もう一つの高田保馬像を浮かび上がらせてみたい。そのさいに着眼したのは「全體社會」

概念である。高田社会学の鍵概念である「全體社會」の観点から彼の学問を整理しなおすこと、またそれによって戦中の著作に限定した批評からはみえてこない、高田社会学の一貫性と独自性を明らかにすること、それが本稿のねらいである。⁽¹⁾

一 高田民族論への批判

新明正道がXYZの筆名で高田の「人類主義から民族主義への轉向」(新明、一九三四・二二七)を難じて以来、その種の批判は現代に至るまで絶えない。それらは、公職追放的一幕ともあいまって、高田の「大東亜戦争」前後の文業、わけても民族論関連の研究に、いまだ暗い翳を落としている。

例えば清野正義は、一九三二(昭和六)年の満州事変から敗戦の一九四五(昭和二十)年に至る、いわゆる「十五年戦争」と高田民族論との関係を、次のような厳しい調子で追及している。すなわち「国策課題への実践的コミットメント」である高田の東亜民族論は、『大東亜共栄圏』『大東亜共同体』などの思想ないしイデオロギーの『民族の理論』による理論化(清野、一九九二・四九〇)

にほかならないものである。また「経験科学的に論証することはほとんどまったくなかれの念頭に存在しなかったかのように見える」こと、あるいは「日本帝国主義が『十五年戦争』中に行ったすべての侵略行為を合理化し、これを東亜民族の自己防衛の行為として語ることを可能にする」理論であったことなどを難じている(清野、一九九二・五一)。さらに福岡良明は、高田が民族に注目するようになったきっかけを「満州事変以降の政治状況、とくに日中戦争」(福岡、二〇〇三・二二)に求め、その「民族社会学」が「東亜共同体論を取り入れながら、東亜民族論を展開」するようになったのだという(福岡、二〇〇三・二四四)。くわえて河村望は、「高田保馬が平和主義と世界主義を最終的に放棄するにいたったのも、国際・国内情勢についての彼の見通しの誤りが日中戦争の開始によって決定的に明らかになったから」だとする(河村、一九七五・二六〇)。のみならず、「高田は、日本民族の『優秀なる資格』を『共同社会的結合の強さ』と『争闘本能とそれにもとづく勢力要求』にもとめて、侵略戦争を賛美していったのである」とした(河村、一九七五・二四七)。

さらに批判の矛先が敗戦直後の言動へ向けられているも

のもある。高田は、公職追放の処分を取り消されたことにより、『十五年戦争』の時代のすべての『責任』が『みそぎ』されて、社会学者としての理論上の責任までもが水に流されてしまったかのように復活した(清野、一九八七・二二〇)のだと。あるいは「一九四五年八月一日を境にして、一八〇度転換する評論を何の自己批判をすることもなく開陳する知識人としての責任倫理」を問うものもある(北島、二〇〇二・一〇六〜一〇七)。

こうした批判は、なにも今にはじまったことではなく、すでに敗戦直後からなされており、高田はそれらについて次のような反論を書いている。「……」若干の雑誌に、戦争中の評論や著作を検討するといふ記事があらはれた。中には私が耐乏論を以て軍部追隨をしたといひ、私の民族主義を以て戦争の支持であるといふ。耐乏論は明治四十四年以来的の宿論である。追隨したのは軍部ではないのか。私の民族主義の何であるかは『民族論』と『東亜民族論』とが之を正面から証明する。前者によればそれは自由主義以外の何者でもない。後者によればすべての戦争理由は『云ひわけ』に過ぎず、所謂派生体である。論者は自己の無知を告白してゐる」(一九五七・八)。

確かに純粹に学術的な著述のみならず、あまたの時論を一心に書きつづけ、ただならぬ情勢の解釈を一社会学者として読者に示そうとしたことは事実である。それが期せずして、戦争を肯定し、大衆をおおる結果となったのだろうか。むろん高田本人にその意図はない。意図に反して大衆が煽動されている兆しを察したとすれば、そのようなことは避けたはずである。戦後の発言ながら、高田は戦争中に己に課した禁欲について語っている。

「聖戦、東亜共栄圏、大東亜戦争、八紘一宇、東亜建設等多数の軍部革新官僚の用語、又は文部省の日本精神的諸概念が作られた。私はそれを一つも採り上げて用ひないだけの潔癖を推し通した。これは軍部の動きに対する最低限の反抗である。反覆して云ふ。私は自分の言説の中に『大東亜』といふ文字を避けている。之を筆の汚れと考へたのである」(一九五七・一六八)。

ともあれ、これまでみてきた批判から浮かび上がってくるのは、「民族主義への轉向」や「軍部への追隨」を行う、あるいは時勢の変化によって「一八〇度転換」するような評論を書く高田保馬像である。確かにこれは高田のある一時期を切り取った限りでは一面の事実ではある。しかし

「轉向」や「追隨」をいうには、そこにいたるまでの、あるいはそれ以降の高田の言説を丹念に追っていくという作業が不可欠であろう。それを行うことで「轉向」や「追隨」や「一八〇度の転換」とは違う、もう一つの高田保馬像が示されるであろう。つまり、高田の民族論は、少なくとも着想としては「人種問題私見」（一九一八）に遡りうるものであるし、理論の骨格からいえば、戦後初の本格的な著作である『世界社會論』にももちこされている「宿論」であることをここで明らかにしたい。それによって理論や主張に変節の miralena、別の統一的な高田像が浮かび上がってくるであろう。⁽³⁾

二 高田民族論の萌芽としての「人種問題私見」

高田が民族に着目するようになった契機というのは、実はよくいわれているような「滿州事変」や「支那事変」ではない。それをつきとめるには、大正年間はまだ遡らねばならない。民族という発想が、一九一九（大正八）年の帰郷のさいに勃然と沸いて出たときのことを高田は回想している。

「社會學原理をかいいた時の私には、階級といふことより

頭の中になかった。コスモポリタンの傾向に支配されてゐた私にとつては、民族と云ふものは、極めて軽い意義しかもち得なかつた。然るにそののち、心の奥から民族と云ふ大なる事實が頭をもち上げて來た。〔……〕この民族と云ふ事實をどうするかと、心の中で叫びを上げたのであらう。〔……〕階級の將來を考へると共に、民族の將來を考へねばならぬと思つた。また、階級問題に對するところの一定の對策は、屢々民族問題の上に新なる困難をもたらすであらうとも考へた」（一九三四・一九）。さらにいうと、「民族を重視する態度が漸く強くなつて來た」のが、一九二六（大正十五）年に始まる河上肇との人口問題論争であることも明しており、その意味で、「滿洲事變あたり以來急に附焼刃をしてゐる人々とは動きが別である」ことをはっきりさせておかねばならない（一九三四・二〇）。

かんじんの高田の民族論の骨格があらわれているのは、『大阪毎日新聞』に寄せた「人種問題私見」（一九一八）である。「我國の提案にかかる人種平等の原則は遂に有耶無耶の形に葬られてしまつた」との嘆息より始まるこの記事は、高田民族論を語る上ではさけて通れないものであらう。この冒頭に示されているように、高田の民族論の構想は、

いわゆる「十五年戦争」という時局に便乗して唱えられたものではない。念頭に置かれていたのはむしろ人種差別、不平等の問題であった。つまり高田民族論は、その発想の根源に特にアメリカやオーストラリアに沸きあがった人種差別への不満が蔵されていたといえよう。

アメリカでは一九〇八年に日米紳士協約(その後一九二四年に排日移民法に発展)が、オーストラリアでは一九〇一年に白豪主義を法制化した移民制限法(一九五六年有色人種の移民制限緩和が始まり、一九七三年に廃止)が、それぞれ施行された。こうした風潮に異を唱へる日本政府が、国際連盟に対して提案した民族平等の条項は、ついに盛り込まれずにおわった。「有耶無耶の形に葬られてしまった」というのはこのことをさしている。

一体に人種や民族の差別はいかにして作り出されるのであろうか。高田は三つの要因を挙げている。「一、文化の程度の差異から生ずる侮蔑の念、二、文化内容の差異から生ずる嫌悪、三、容貌、毛髪等一切の物理的特徴の醜悪に伴ふ嫌悪」(一九二〇…一八五)。人種差別の問題は、つまるところ「文化的反感か然らずば美的嫌悪」であって、決まって挙げられる経済的原因のほうは、どちらかといえば

副次的なものに過ぎないのだとする(一九二〇…一八八)。ただしこれらは一般論である。高田につきつけられた問題は、現実として人種平等の原則を無視されてしまっていることへの対応である。少なくとも今ある日本人および有色人種への差別をなくすにはどうすればよいのかという問題である。

それには列強帝国主義に伍するような武力や経済力に訴えることが必要なのだろうか。高田は言下に否定する。これでは日本の孤立化を招くだけであると。ならば不平等な条約や法規の改正であるかといえばそうでもない。差別の問題は国家ではなく、差別を行う国の国民感情に根ざしているからである。国力や国際規約といった、国を介した形での差別解消の方策は、いずれ失敗におわるのだという。こうして異民族への差別をなくすには、差別を受ける民族の「文化的上昇」しかないと高田は考えた(一九二〇…一八八)。

では「文化的上昇」とは何を意味しているのであろう。今風にいえば大衆文化の涵養である。つまり専門家が独占しているところの文化を広く民衆に開放することをそれは意味する。「今日殆ど文化と絶縁せられたる社會の階級を

其束縛から開放して、精神的文化の享樂と創造との事業に與らしめる事である」(一九二〇・一九三)。なかんずく労働者と婦人との文化を享受する機会を増やす努力をすべきであると説く。それならば当時の国家や民族の中で、「文化的上昇」をすでに達成しているものや、逆に達成できもしなければ、しようともしない国家や民族の運命はどうなるのだろうか。これについての予測を高田はつづける。

未開の弱小な人種は、先進文明国の優秀なる人種により、抑圧され、消滅してゆく。他方、抑圧する側の優秀なる人種も出生力の低下に悩まされやがて衰弱する。「かくて地球上に残存する人類は中庸なる文化を有する人種のみとなるのではなからうか」(一九二〇・一九四)。これが高田の一つの見通しである。だが彼にはもう一つの予測もあつた。それはとりわけ民族間の交流ということに重きをおく。「交通の發達は今日大陸の両端の距離を短縮して小島の両端の如くならしめた」(……)。各人種の混和はこれから幾百萬年とつゞくであらう。(……)血液の混合は十分に行はれ、人類は原始に於けるが如くにたゞ一人種となるであらう」(一九二〇・一九七)。

こうして高田は少なくとも分析的予測たらんことを期し

て、「豈學を曲げて黄人に媚ぶるものならむや、今後各國の人口の變遷は必ずや如上の提説を立證するであらう」と述べてこの記事を擱筆した(一九二〇・一九九)。確かにこれは、いまだ予想であつて学問的に練られた想念ではない。にもかかわらず「人種問題私見」が、やがて国家や階級を論じ、さらに民族論をへて世界社會論として展開される着想の一つであつたことは疑いえない。以下で明らかにしようとするのはそのことである。

三 高田社會学の見取圖

高田保馬の社會学を整理するさいには、いくつかのキーワードを考えると都合がよい。人口増加が分業と分化を生じそれが社會變動を規定しているという「第三史觀」。それを細かく見てゆくために案出された「結合」概念。さらにその「結合」の及ぶ範圍を社會と考える一方、それを「部分社會」と「全體社會」とに峻別した。これらの概念をあらゆる社會を分析するために縦横に使いこなし、体系づけようとしたのが高田社會学の特徴である。さらにいえば、家族を「結合」の最小単位として位置づけたり、「結合」の最終段階に国家や民族を見出したりしないところに、

彼の独自性がある。むしろ彼の「結合」概念は、究極的には人類全体にまでゆきわたるものであった。こういった高田独特の社会観は、きわめて早い時期のものであろう。例えばそれは次の引用文にあらわれている。

「社会的密度の増加により、漸く廣き範圍の人々と相接觸するに及べば、ここにかの狹隘なる特定の家族國民と云ふ如き觀念より離れて、直ちに人類世界と云ふが如き思想を出し、人の注意が此上に向けらるるに至る。人類を思ひ世界を思ふところのコスモポリタニズムは、やがて特定の國家特定の階級の尊嚴を疑ひ、あくまで個人を尊重するところの個人主義なり」(一九三三・三一九)。これは『階級考』(一九三三)に所収された「階級基礎の變更」の一節だが、執筆記録をみると一九二一(明治四十四)年とある。人と人の結合が社会を作る。社会には当然のごとく大小がある。その最大究極のものが「全體社會」としての世界社会である。いくら大きな社会であっても、外部にほかの社会を想定しうる限りは、あくまで「部分社會」に過ぎない。というのが高田社会学の根本思想である。この思想が最終的に世界社会論として結実するまでを辿ってみるのがここでのねらいである。

まずは高田が自らの社会学的著作を振りかえって作成した見取図をみておきたい。

一般	特殊
『社會原理』	『社會學概論』
『發業論』	『階級考』
『社會と國家』	『階級及第二史觀』
『人種問題私見』	『國家と階級』
『社會學大憲』	『東亞民族論』
『社會學の研究』	『民族論』
『社會學大憲』	『世界社會論』
『社會學大憲』	『社會學大憲』
『社會學大憲』	『社會學大憲』

(一九三三・四四、四五參考に筆者が作成。*印は筆者の追加)

一九三二(昭和六)年から一九四五(昭和二十)年までのいわゆる「十五年戦争」への関与を疑問視してきた批評者の多くは、『民族論』およびその前後の時論風の述作しか視野に収めてこなかった。⁽⁴⁾しかし高田の「轉向」をいうには、彼の主張にどのような変化があったのかを明らかにしなければならない。ある一時期の言説を強調することで「轉向」や「追隨」を証明したつもりになるのは避けなければならぬことである。さきに引いた「追隨したのは軍部ではないのか」という高田の反論は、そういう一面的な批判に向けられたものであったのだろう。

それでは、これより右の見取図にある「人種問題私見」にはじまり『社會と國家』から『民族論』を経て『世界社会論』へといたる特殊問題の系譜を辿りなおし、彼の主張

の一貫性を示すことにしたい。そのさい特に重視したいのは「全體社會」概念である。

四 『社會と國家』と『全體社會』

社會とは何か。それは広くいえば「結合」、狭くいえば「一體の意識」である(一九二二・一二一―一二三)。では社會の種類にはいかなるものがあるのか。一例をあげると宗教団体、政党、階級、職業団体、産業組合、民族、家族、地方団体、國家などである(一九二二・一三三)。これらのうちで自足的、封鎖的でないものを、高田は「部分社會」と呼ぶ。自足的、封鎖的でないということは、さらに上級の概念で括ることができるということである。そこで「部分社會」を統括するものとして定位されたのが「全體社會」である。「全體社會」とは、「一方に於て相互に密接なる聯絡を保てる一切の結合の集積を意味し」、「他方に於てこれらの結合に與れる人人をも關係」させる「關係的要素」を意味している(一九二二・一三三)。

こうしたことを前提として、究極最大の「全體社會」である「世界社會」が見定められることになる。「世界の各部分の交通が頻繁に行はれる、從ひてすべての社會的結合

を包括する範圍を求むればたゞ世界的社會または the humanity (人類社會) としての the society あるのみ」(一九二二・一五、○内引用者)。とはいえ「全體社會」が、必ずしも世界社會というわけではない。「全體社會」は自足的集團でさえあれば大きくても(世界社會)、また相對的に小さなものであっても(封鎖的民族ないし國家)かまわないのである。⁽⁵⁾あくまでも「結合の網の自足的封鎖的組織の範圍が一の全體社會の範圍である」(一九二二・一七)という。

なお「全體社會」の「結合」には三つがある。第一は成員全体の統一意志、第二は成員の一部の統一意志、第三は成員相互の種々雑多な「纖維的結合」である(一九二二・七七―七八)。いささかわかりにくいこれらの「結合」様式を、高田は鉄筋、煉瓦、セメントになぞらえている。すなわち第一に「全體社會」という建物の骨組を成す鉄筋が統一意志で、それに敷き詰められる煉瓦が一部の結合意志をさし、さらにその隙間に流し込まれるセメントが第三の「纖維的結合」⁽⁶⁾を意味しているというのである(一九二二・七八―七九)。

それでは次に、これらの結合の範圍に目を転じてみよう。

この結合の網の目、すなわちコミュニケーションの範囲は、歴史の流れに従って追跡してゆくと、地域的、空間的な障壁を飛び越えてゆく傾向をもつことに気づく。「所謂結合の空間的緊張力 (die räumliche Spannungskapazität; einer Vergesellschaftung)」は既に國民の範囲を超えて世界的たらむとしつゝある。統一的團結は大抵此個人的結合の網の織られたる所に此を根柢として成立する。部分結合の錯綜や其國際化は此個人的結合の地域的開放の一表現と認むべきであらう」(一九二二・二七四)。

しかもこうした地縁とのつながりを断つコミュニケーション網の広がりについて、高田は以下のように敷衍している。「全體社會の非地域化と云ふ事は二を意味し得る。一は部分社會の範圍が地域によりて限らざるに至る事にして、他は最も包括的なる全體社會が一國家一地方の範圍によりて制限せられず、愈世界的のものに化する事である」(一九二二・二七四—二七五)。ここに高田は「全體社會」が「國家の範圍からの逸脱せんとする傾向」を読み取っているのである。

けれども、それは可能性として抽象的に論じられたばかりで、実像を描写するには至っていないことは注記してお

かなくてはならない。「社會と國家」を執筆する一九二二(大正十一年)という段階で、具体性をもった「全體社會」を描き出せるような実例はとぼしく、また想像の域を出るものではなかったからであろう。「全體社會」が潤色されるには、東亜民族や世界國家という現実味を帯びた実在を必要としたのである。

五 「民族論」と「全體社會」

すでにみた「人種問題私見」でいわれていたことは二つのことであった。一つは文化的水準が程度の民族ないし國家が生き残るということ。これは彼の『民族論』の中では第九章「民族の周流」で深められた説である。いま一つは複数の民族の相互交流が進むことで、より大きな民族へと融合するということで、これは同書の第一〇章「民族融合論」において周到に論じられている。このようにあくまでも予想にとどまっていた「人種問題私見」での主張は、『民族論』において学問的な検討が加えられることとなった。のみならず、「最近一二世紀は国内に於ける階級的懸隔を著しく短縮したと稱せらるるに拘はらず、これら有色民族と白人との關係を改めることはなかつたといひ得よ

う」(一九四二・二五)。という嘆息もらしている。これなどは二十年を越える「人種問題私見」での嘆きに等しいものといえよう。いっこうに改まる様子をみせない人種・民族差別の問題、その真相を探ることが高田民族論のねらいであった。

では高田にとっての民族とは一体いかなるものであったのか。「民族は全體社會そのものではない。種々の部分的なる集團が全體社會の中に含まれてゐることはいふまでもないが、それは民族の中に含まれるのではない。民族もまた、畢竟一の部分社會に過ぎず、たゞ部分社會のうちの特に重要な意義をもつもの、生活の極めて廣汎なる範圍に互れるものといふに過ぎぬと思ふ」(一九四二・二八)。

このように民族が「部分社會」であるとすれば、価値觀を同じくしないもう一つ別の「部分社會」との対立は避けられない。もし対立を避けるとすれば、それは民族という、いいかえると「部分社會」という偏狭意識を越えるもの存在であろう。確かに民族は階級と同じく結合意識の強い「部分社會」である。しかしその結合に楔を打ち込む要素もないわけではない。

こうして高田は「如何なる因子乃至事情が世界の統一

文化を形作るであろうか」という問いに答えをだす(一九四二・九五)。民族、階級、あるいは「部分社會」の偏狭意識を越えるものとして挙げられているのは科学や技術や經濟である。「あらゆる文化内容のうち、民族性と階級性を最も脱落し易い部分がある。それは目的合理性の支配範圍、即ち科學、技術ひいては經濟の範圍である」(一九四二・九四)。これを楔として偏狭性を打破してゆく動きが、「利益社會化」や「理化化」ないし「目的合理性」ということになる。まずは「交通密度の増加と人口動性の増加に伴ふ模倣同化」により、ついで目的合理性の重要度が増すことにより、文化は統一へと向かう。いいかえると「文化の世界性は其民族性の喪失であり、此喪失は主として理化の作用にまつと見るべきであらう」(一九四二・九五)。

けれども、ここにきて高田の記述は方向転換を行う。民族の偏狭性を越へ一足飛びに「全體社會」へと飛び込むことは、やはり理化にそむくことにならうと。世界社会にいたるには、国家や民族の障壁を越え出なければならぬ。しかしそれには段階がある。その段階を見極めることが重要なのだが、高田はそれを「廣民族」というものに見出す。具体的理念としては「民族協和」である。「此(利益社會

化の)大勢に抗してあくまで鎖國封鎖の方針をとることは民族そのものの劣弱化を来しやがて衰滅に導く。しかし逆に「利益社會化の道を急ぎ民族に對する犠牲を忘れ民族の統制を緩めること」もやはり自滅に通じる。それを避けるために「民族協和」が必要なのだが高田は考えた(一九四二・二二五)。

「民族協和」を一つの理想として語りえた時代があった。⁽⁷⁾

高田は「民族協和」をどのようにとらえていたのか。第一に「國家を以てあくまで運命の連帯を作り上げ、彼等をして別々の運命をもたぬことを自覺せしめることであり、彼等をして全面に互る生活の接觸をもたらしめることである」。そして第二に「民族の正當なりと思はるる利益を保護し其生活を庇護すること」である(一九四二・二二四・二二五)。この主張は少なくとも「廣民族主義」を介して人類社會、世界社會に向かうことを前提とする限りでは一つの理想であるのかもしれない。⁽⁸⁾

では「世界的なる民族の形成が如何にして可能であるか」といえば、それは「血液の混和」が進むことである(一九四二・二二〇・二二一)。血液の混和が達成されるまでの道のりについて、高田は二種類を想像している。第一

は民族の交流の活性化である。しかし交通の発達により血液の混和は進むとしても、それはなお遠き将来のことである。したがって現実的な道としては次のような過程が考えられよう。それが第二の道筋である。民族は文化の発達につれて成員の分化が進み、しだいに民族内部の結合を弱めてゆく。しかし結合は弱まる一方ではない。古い結合にかわって、民族の外部にいる類似性の強い成員との結合が新たに生まれてくるからである。つまり「内部的結束の弱まる傍ら外部的結束は愈々準備されて行く。かくて此過程の進行するところ、民族間の障壁は漸次撤去せられあらゆる民族を挙げての民族をなす方向をさして歴史的進行が營まれる」のである(一九四二・二二一)。⁽⁹⁾

めざすところは「全體社會」の「結合」である。「全體社會の結合は、一方に於て民族の結合を一の重要な部分として含むとともに、其他のあまたの結合の交錯によつて成立し、従つて時には民族の結合とは反對の方向をもつところの、即ちこれに對立しようとする集團の結合すらもその一部として含むわけである」(一九四二・二二八)。だが「對立しようとする集團」との「結合」をめざすからには、従来の「民族主義」では支障がある。こうして考案された

のが「廣民族主義」であった。

「……」過去の世紀は狭き民族主義の時代であつた。それによつてはじめて民族統一と民族國家の形成とが完成せられたのである。而してその際かゝる廣民族主義は未だ成立することがなかつた。國家をこえたるものを考ふる必要のあるときには直に抽象的な人類又世界が考へられた。

けれども資本主義の進行とともに社會學的なる事情は、即ち結合と分離を支配するところの事情は全く一變した。即ち狭義の民族主義を固守しそのみに頼ることは、民族を亡ぼす所以である」(一九四二・一四三―一四四)。要するに「物質文明の進歩に伴ふ距離の短縮がすべてを大規模化し、従つて民族をして此封鎖性の一角を開放せざるを得ざらしめる。此開放によつて成立するもの」、それが「廣民族主義」にはかならない。⁽¹⁰⁾こうして「廣民族主義の裏づけをもたぬ民族主義は今や過去の遺物に過ぎぬ」と宣言されるにいたるのである(一九四二・一四四)。⁽¹¹⁾

だが、もう一つ忘れてはならないのは、民族融合を可能にする武力ないし國家權力の問題である。民族融合は、決して「混血、模倣乃至同化、内外の結合分離」だけでは達せられないのだと高田はいふ(一九四二・二二三)。「單に

これだけの過程から民族の障壁が撤去せられ新たな複合民族の生まれたといふことは一例もないであらう。之を作るときには他の根本事情を要する。それは即ち國家權力である、立入つていへば武力的強制である」(一九四二・二一四)。この主張を戦争とのかかわりでもう少し深めておこう。

戦争とは「集團間の武力による相互的活動」(一九四二・一四七)であり、「その長さから見て一の持續的な關係」である(一九四二・一四八)。そうした闘争の根本にあるのは、「集團的自我の優越要求である、いはゞ集團自體の勢力意志である」という(一九四二・一五三)。このような性質をもつ戦争の結果もたらされる感情の中に、勝者への反感や憎悪がふくまれることは、もちろん避けられないであらう。しかし、それはあくまでも一過性のものであり、むしろ高田はやがて芽生えるであろう融和や親和の意識のほうを重視する。戦争の結果が一方の完全な敗北の場合には、「一方の反抗乃至對立の斷念」につづいて、「成員の個人的意志の中にはその勝利を得たる集團に對する尊敬の念を生ずる」結果となる(一九四二・一六六)。要するに「戦争は兩集團の成員相互の間に接觸を繁くし、そこ

に魂の交流ともいふべき層に於ける結合を促し、又は文化内容を取交させ又は相互の文化に對する親しみを植ゑつける」(一九四二・一六七)のである。高田の念頭にある、こうした国家ないし民族と戦争との関係は次の一文に集約されていると思われる。

「(征服又は併合、聯合等の結果として)國家は民族的異質要素を包攝する。此異質要素は同一なる國法の下に生活し、又同一なる外的との自然なる壓迫に對して共同に自己を防衛する、従つて自ら運命の共同といふ紐帯によつてつながれる。血液は接觸の久しき間に融合し、文化内容は自ら相同化する、又は一方が他方の文化を吸収する。かくて、血縁的に又文化的に漸次同化的なるものとなるのみならず、同一の運命によつて結ばれる。即ち新しき民族の鑄造が行はれる。ことに此同化乃至融合を急速ならしめるものは、外部との戦争である。戦争はいふまでもなく、内部の結合を強化する。此強化は自ら血液の混和と文化的同質化とを刺戟するのみならず、運命の共同を深刻に意識せしめる。いはゞ民族の鑄造は此戦争によつて急速に進行する」(一九四二・一八〇)。

高田の胸中にあつたのは、つまるところ「權力なくして

民族の改鑄の行はれたることはない」(一九四二・二二五) (二二六) という事実認識であつた。

六 『世界社會論』と「全體社會」

さてそこで、これから述べようとするのは、「全體社會」を手がかりに『民族論』から『世界社會論』へと流れる思考の連続性である。なにより高田自身、『世界社會論』が「戦争中の著作『民族論』の続編とも見るべきものである」(一九五七・四八)ことを告げているし、『世界社會論』の「自序」でも『東亞民族論』や『現代社會の諸研究』との関係に触れている(一九四七・iii)。

『社會學原理』以来、一貫して抱きつづけてゐる部分社會構造の見解は次の如きものである。まづ全體社會の範圍を限るものは、少なくとも近代國家をもつ全體社會について見る限り、國家である」(一九四七・四九)。この「全體社會」概念を國家から世界社會にシフトさせて論じているのが『世界社會論』にはかならない。「國家を中心とする全體社會の構造を考へたるが如く、全くこれと平行的に、全體社會としての世界社會を考へ得るであろう」(一九四七・五二)といふのはそのことをさしている。

『世界社會論』の整理によると、「全體社會」とは、(一) 國家のような成員全てを含む社會(「全員社會」と、(二) 相互作用する個々人の交渉(「纖維社會」)、そして(三) 「全員社會」に属さない集団を包摂するものである(一九四七・五〇)。これらを一括して高田は「世界社會」と呼んだ。それで思い出されるのは、『社會と國家』における「全體社會」論の理路である。それによると國家とは、(一) 成員全体の統一意志、(二) 成員の一部の統一意志、(三) 成員相互の種々雑多な「纖維的結合」の総合であった(一九二二・七八〜八〇)。また『民族論』にも想起すべき以下の記述がある。すなわち「全體社會」の結合は、(一)「民族の結合を一の重要な部分として含むとともに、(二)其他のあまたの結合の交錯によつて成立し、(三)従つて時には民族の結合とは反對の方向をもつところの、即ちこれに對立しようとする集団の結合すらもその一部として含む」(一九四二・二八)。この「全體社會」概念の平行関係は、『世界社會論』の中ではっきりと述べられている。すなわち「全體社會の構造は今や三重の結束綜合としてあらはれる。全員社會ともいふべき國家、時としては民族が之を統一する」と(一九四七・五〇)。

以上のように『社會と國家』から『民族論』、そして『世界社會論』へと脈々と流れているのは、「結合の網の自足的封鎖的組織」(一九二二・一七)である「全體社會」概念であった。これはそのまま高田が夢見た人類社會(the humanity)としての社會、コスモポリタンの世界を学問的に洗練させていった足跡をあらわしている。そして『世界社會論』の執筆を後押ししたのが、ほかでもなく第二次大戦後の世界の動きであった。國際連盟の反省を活かして作られた國際連合により世界國家の建設が夢ではなくなったのである。かつては國家や「廣民族」など不完全な形でしかあらわれなかった「全體社會」が、ようやく世界社會の成立によって完全な姿をあらわすことになったのである。

しかしここでも一つ附言しておかなくてはならない。「廣民族」の成立がそうであったように、世界社會の成立も科学技術それ自体ではなく、「武器と戰術」の進歩によって達成されるという事実である。

「一國を範圍とする全體社會の構造の中に強制による組織が介入するが如く、世界的なる全體社會の構造の中にまた強制が介入する」(一九四七・七二)。つまり「國際間に

於ては、少くとも民主主義の原則の支配の下に於て、從つて近代に於て、國家間の平等、民族間の平等が原則となつてゐるけれども、事實に於て經濟と文化を含めての實力の差異は、自ら強制の關係を成立し介入せしむるに至る。

ここでいう「強制の關係」とはかつての征服國家、近代帝國主義ないし植民地主義、すなわち經濟的、政治的、文化的な從屬關係のことをさしている(一九四七・七三)。

確かに「強制が介入することでの否定面は強い。しかし高田はこれを肯定的にとらえかえず。從屬關係の結果としてあらわれるのは、「一は兩者間の密接なる接觸と統一」、「二は兩者の利害の交錯」であると(一九四七・七三)。「要するに世界社會に於ける強制の作用は根本に於いて、基礎社會の人為的形成にある。自發的には形成せられないであらう直接結合的全人的不定目的的結合と、これに對應する組織とを強制によりて形成するとともに、内部の文化的血液的の同化、適應、觀念の變化によりて之を自發的なる結合即ち内的結合にまで轉形し純化せしめようとする。(……) 戦争及び其他の國際的抗争自體の弊害と慘禍とは眼を蔽はしむるものがあるけれども、勢力範圍自體に於ける此社會化作用は否定し難きものがあると思はれる」(一

九四七・七五)。

すでに見たとおり、この論脈もやはり少なくとも『民族論』にまで遡りうるものである。ただ興味深いのは、これが敗戦直後の発言だということである。占領した側ではなく、された側にまわってからでもなお、こうした主張を一貫して訴えつづけているのである。「武器と戦術との飛躍的進歩が今や世界國家の形成を焦眉の急と考へさせるとともに、此を單なる構想に止まると見る傳統の見解を根本から震撼せしめつつある。最近の過去に至るまで世界國家は空想乃至理想家の夢として取扱はれた。現在に於てそれは迫りつつある大勢であるともいへる」(一九四七・四八)。こう記しているのは、占領三年目の『世界社會論』にはかならない。あるいはこれは占領軍へのあてつけであろうかと深読みしたくなるが、それは間違いであろう。そういったとらえかたは、『民族論』や『東亞民族論』が「日本帝國主義」の占領政策の正当化だときめつけるくらいに的外れである。ここで高田は、「二十世紀初頭に於て社會學者の抱ける夢」、すなわち世界人類が一つになるというコスモポリタンの夢想が、皮肉にも戦争の結果としてもたらされるというアイロニーを語っているのである。歴史に鑑みる

と、武力というものが世界統合の少なくとも一つの有効な要因であった。高田はそのことを繰り返し述べたにすぎない。

むすび

本稿のねらいは、高田保馬の描きだす「全體社會」像の意味をとらえかえすことであった。より内容にそくしていえば、批判の絶えない高田民族論を、彼の生涯にわたる社会学の営為の中に位置づけることによって、それを新たな視点から読みなおすことにあった。高田の文業は「全體社會」という独自の概念によって、一つの体系として纏め上げることができるのである。本稿でみたように、「人種問題私見」にはじまり『社會と國家』そして『民族論』を経て、最終的に『世界社會論』へと到達する一筋の軌跡は、「全體社會」を基軸として描きうるものであった。こうした一貫性をもった体系的な高田像からすると、「十五年戦争」期には学を曲げ、敗戦後には主張を「一八〇度転換」したという批判はあたらないうことになるだろう。彼の社会学には、「全體社會」という主柱がしっかりと貫かれていたのである。「全體社會」とは孤立し、自足した封

鎖的な社会であり、その条件をみたしていれば規模の大小は問題ではなかった。むしろそれは民族や国家、ひいては世界社会の読解にも応用できる、すぐれて分析的な概念だったのである。ようやく世界社会の統一が現実のものと感じられるようになったグローバル化時代。そうした時代にこそ高田保馬の「全體社會」としての世界社会という考えかたは、われわれに豊かな発想をなげかけてくれるのではないだろうか。

(1) 本稿では高田の一貫性を明らかにすることに重きをおいたために、歴史的事件と高田の学説との関連性の問題については付随的に言及するにとどめた。これらの問題を明らかにすることは今後の課題として残されている。

(2) 例えば日米開戦直前の座談会でも高田は戦争回避を訴えている(一九三九)。

(3) もし、この民族論前後の論理的一貫性が明らかとなつた上で、なおも高田民族論の批判を行う価値があるとすれば、それは戦間期の「追隨」や「轉向」などではなく、高田社会学の理論構造自体に内在する瑕疵そのものをつきとめることでなければならない。

(4) ただし批判的ながらも清野の一連の論文は、『社會學

原理』から『民族論』まで広く見渡している。

(5) ただし時代を近代に限って言えば閉鎖的、自足的な民族国家を「全體社會」と見なしうるとしている(一九四七・四九)

(6) 『社會學原理』にも「全體社會」を建築物に擬している箇所がある。「此全體社會の組織は例ふるに宏壯なる建築の如し、國家は地方團體其他の公共團體ならびに政黨學會社等の社會團體と共に柱梁壁床の基礎的構成分子をなし、其他數多の社會圈ならびに意識の積分作用を経ざるが爲になほ圈をなすに至らざる社會關係は、畳となり窓掛となり家具となり塵埃となりて茲に全體の建築を構成す」(一九一九・九三三)。「社會學原理」と「全體社會」の關係についての議論は他日を期したい。

(7) 一例として中久郎(一九九二)が自らの建国大学での学生生活を振りかえった満州国の理想と現実についての論考をあげておく。むろんこの高田のいう「民族協和」の理想は、現実の歴史においては、やはり挫折したといわねばならない。五族協和の理想を掲げる満州国が実行力としての武力に頼り、方向性を誤らせる結果となったように。

(8) いうまでもなく第一と第二の内容のいずれを強調するかで事態は大きく変化する。第二を名目的に掲げて、第一の立場を推し進めれば、これは容易に植民地支配を正当化

する理屈に転落する。

(9) とはいえ、これとても近い将来のこととはいえないし、それどころか逆の動きも想像できる。したがってここで融合の過程がどのように進行し、あるいは逆にどのように後退するのかをみておきたい。まず國家の広域化、交通の発達、合理化により民族の融合が進む(一九四二・二一九～二二〇)。だが他方において理知化の結果である一夫一婦制度や個人主義や福利思想が血液の融合の妨げとなる。また交通や理知化や經濟の進歩が、戦争を拡大させる方向に働くと、戦時の国内統制經濟により融合の進行は止まる(一九四二・二二〇～二二二)。というように血液の混和は必ずしも一直線に進むというわけではない。なおこれは『社會學原理』第四篇「社會結果論」でも詳しく述べられている(一九一九)。

(10) 高田はこれについて「一面からいふと基礎社會の擴大といふ歴史の壯嚴なる進行の一節に外ならぬ」と述べている(一九四二・一四四)。すなわちこれは「基礎社會擴大縮小の法則」として定式化されていた法則を意味する(一九一九・一〇七八～一〇八六)。

(11) たしかに「廣民族主義」にまつわる危うさは看過できない。例えば高田は、ナチスの理論家ローゼンベルクが一九四〇年に行った北歐のゲルマン民族の躍起を促す講演を

傍注で引き合いにだし、「私のいふ東亞民族主義もまた、此廣民族主義の一例である」(一九四二・一四二)と擬している。これだけを見ると侵略戦争への関与を疑われてもわりはない。ただし、さらに進んで高田が「歐米兩洲に跨るアングロサクソンが相合して一の廣民族主義的行動に出でんとすることを示す」(一九四二・一四三)としているのはいかに理解すべきであろうか。東亜民族主義の危険性を批判するのであれば、同時にアングロサクソン民族主義のそれをも批判の対象に含めなければ公平とはいえない。

文献

* 引用は(著者、出版年・頁)の順で記す。なお高田の著作にかぎり著者名を省略。

河村望、一九七三、『日本社会学史研究』上・下、人間の科
学社。

北島滋、二〇〇二、『高田保馬——理論と政策の無媒介的合

一』東信堂。

新明正道(筆名XYZ)、一九三四、『高田保馬・小泉信三』

『經濟往來』第九卷第一〇号。

——、一九八一、『第二次大戦後における高田博士の社会学
会的業績』、高田保馬博士追想録刊行会編『高田保馬博
士の生涯と学説』創文社。

清野正義、一九八七、『高田保馬論——「民族と市民」問題

への社会学史的アプローチの試み』、『立命館産業社会論集』

通号五二。

——、一九九二、『高田保馬の東亜民族論』、戦時下日本

社会研究会編『戦時下の日本——昭和前期の歴史社会学』

行路社。

大道安次郎、一九五三、『高田社会学』有斐閣。

高田保馬、一九一八、『人種問題私見』、『大阪毎日新聞』七

月十日から十六日、初出未見(一九二〇、『現代社会の諸

研究』所収)。

——、一九一九、『社会学原理』岩波書店。

——、一九二〇、『現代社会の諸研究』岩波書店。

——、一九三二、『社会と国家』岩波書店。

——、一九三三、『階級考』聚英閣。

——、一九三四、『貧者必勝』千倉書房。

——、一九三五、『民族の問題』日本評論社。

——、一九三九、『日本經濟の對米決意』座談会、『文

藝春秋』昭和十四年十一月号、(出席者 河田嗣郎・高田

保馬・中野登美雄・本位田祥男・山崎靖純)。

——、一九三九、『東亜民族論』岩波書店。

——、一九四二、『民族論』岩波書店。

——、一九四七、『世界社会論』中外出版。

——、一九五七、『学問通路』東洋経済新報社。

高田保馬博士追想録刊行会編、一九八一、『高田保馬博士の生涯と学説』創文社。

中久郎、一九九二、『民族協和』の理想——『満州国』建国大学の実験、戦時下日本社会研究会『戦時下の日本』行路社。

福岡良明、二〇〇三、『民族社会学』のナショナリティ——高田保馬・小山栄三の民族認識を手がかりにして、『ソシオロジ』第四七卷第三号(通号一四六号)。

山室信一、二〇〇一、『思想課題としてのアジア』岩波書店。
山本礼子、一九九四、『占領下における教職追放』明星大学出版部。

二〇〇三年十月二三日受稿

二〇〇三年十一月十七日レフェリーの審査をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)